

勇気が教えてくれたもの

小松市立金野小学校 六年 笠 卷 省 吾

「また、負けちまった。」

一 ひきのカブトがそう言った。太陽がギラギラ照りつけるこの森にはカブトやクワガタがたくさんいた。ここでは、毎日すもう大会が行われているのだ。

一番弱いカブトは今日も負けていた。名前は「カブン」だ。一番弱いのでいつもみんなから馬鹿にされていた。とても強いヘラクレスは、みんなから「クレス」と呼ばれていた。すもうはだれにも負けず、カブトやクワガタの中で一番大きい。強くてかっこいいので誰もが尊敬していた。一番弱いカブンには二ひきの友達があった。それはカブトの「カギ」と「フォト」だ。とても優しかった。この二ひきとは小さい時からの知り合いだった。それはこん

な出来事だった。

ある夏、カブンは眠っていた木の穴から外に出た。すがすがしい風が体に当たった。とても気持ちよかった。少しして中に入ろうとした。その時だ。とても大きく大きな鳥がカブンをつかまえて飛び去った。

「誰か助けて！」

カブンは大きな声でさげんだ。その鳥はうがちぎれそうなくらい速いスピードで飛んでいた。その時、向こうの方から「ブーン」と何かが飛んできた。二ひきくらい。そして鳥につっこんだ。鳥はカブンをはなすと飛んでいった。

「ありが…どう。」

カブンはそう言った。

「大丈夫かよ。」

助けてくれた二ひきはそう言ってくれた。とてもうれしかった。二ひきはとてもたくましかった。それから二ひきはカブンの友達になった。

太陽が去り、月が現れた。あの時の夏と同じで今日は満月だ。

すもう大会も終わり、カブトたちは次々と家に帰っていった。でも一ひきだけは帰らなかった。それはカブンだった。カブンはみんながない所で、毎日特訓をしていた。強くなりたい、そう思っていた。体がボロボロになった。たくさんの虫たちが演奏していた。カブンは耳を澄ませながらとうとうとその音を聞いていた。いつの間にかカブンは眠ってしまった。目を覚ますと家にはいた。

「何でだろう。」

不思議に思っているとカブンの友達のカギとフォトが樹液をなめていた。

「やっと起きたか。」

フォトはそう言った。昨夜寝てしまったので家まで連れてきてくれたのだ。そして、三ひきで樹液を楽しくなめた。おいしかった。

今日もすもう大会が行われる。今日こそは勝ちたい。そう思っていた。毎日の特訓の成果を見せてやる。そう心にちかった。

「残ったー。」

行司の声がひびき渡る。今日は運が悪く初めからあのクレスと戦うことになった。

「おりゃー！」

クレスの気合の声にカブンはビビッてしまっていた。おそろおそろクレスの体にぶつかった。

「そんな程度か。」

クレスはそうつぶやくと、この森で一番大きな木までカブンをつき飛ばした。

「ドカン！」

「このお、また負けちまった。」

心の中でそう思った。カブンは立ち上がると、すもう場までよろよろと飛んでいった。心の中でイライラしながら見ていると、向こうから何かが飛んできた。

「何だありゃ。」

「何だ、何だ。」

すもう場全体がざわめいた。その時カブンの記憶がよみがえった。あの時の鳥のことを。

「逃げるー！」

カブンは大きな声でさげんだ。だがその鳥は一ひきのカブトをつかまえて飛び去った。それはフォトだった。

「待てー！」

カブンとカギはその鳥を追いかけた。しかし、追いつくことができなかった。

「絶対助けるから待ってろよ。」

カブンは心にちかった。

あたりを見回すと、文字の書いてある葉っぱを見つけた。そこにはこう書いてあった。「海をこえた森で待っている。」

誰が書いたのだろう。カブンとカギはとにかく急いで海に向

かった。海はとても遠かった。すもう大会の後で二ひきに体力はあまり残っていなかった。でもフォトのため、友達のために力をふりしぼって飛んだ。

「フォト大丈夫かなあ。」

「食べられてないかなあ。」

そう思うと心が暗くなった。

「あの時助けてくれたように、今度はぼくが助けてやる。」

カブンは海の間を見つめながらつぶやいた。

太陽が昇るころ、ようやく森にたどり着いた。海は太陽の光を浴びてキラキラ輝いていた。その時、突然海の中から龍が現れた。

そして、こう言った。

「どこへ行く。」

「あの森です。」

カギはおそるおそる答えた。すると龍は

「ふうん。ここは通さない。通りたければ何かを置いていくのだ。」

「じゃあ、この木はどうですか。」

そう言うと、カブンは一本の宝石のような木を渡した。それは緑色に美しく輝く不思議な短い木の枝だった。小さい時に拾いずっと大切にしてきたものだった。

「おお、きれいだ。よし、通してやろう。」

龍はそう言うと、口から丸い玉を取り出した。

「これは願ひ玉だ。一つだけ願ひがかなう。お前にやろう。」

「ありがとうございます。」

そう言うとさっそくフォトを助けてくれるように願ひごとをしようにとした。

「今は使わない方がいいぞ。」

龍が静かに言った。どうしてだろうと思ったが、言われたとおりにすることにした。

二ひきは森の中に入っていった。すると、不気味な森の中を飛ばす「バサツ、バサツ」と羽の音がした。二ひきはその音のする方向に向かった。なんと、今からフォトを食べようとするところだった。

「フォトを返せ。」

カブンは勇気をふりしぼって言った。

「本当にここまで来たのか。」

鳥は小さな声で言った。

「おりゃー！」

カブンはびびりながらも鳥につっこんでいった。

「待て。こんな勇気があつて友達思いのカブトは初めてだ。こいつを返そう。」

鳥はそう言うとフォトを返してくれた。

三びきで喜びあう姿を見て鳥は静かに言った。

「おれを仲間に入れてくれ。お願いだ。」

カブンは少しおどろいたがこう言った。

「よし、仲間にしてやろう。」

フォトが言った。

「でも、どうやって仲間にするの？ 鳥のままだとみんなこわがるし……。」

「そうだ。あの願ひ玉を使えばいいんだ。」

カブンはさげんだ。そして願ひ玉にこう言った。

「この鳥をカブトにしてくれ。すると鳥はカブトになった。」

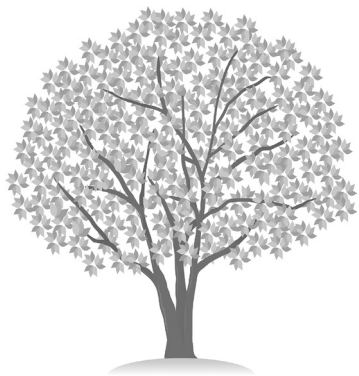
「やったー。」

みんなは言った。

「ありがとう、みんな。」

と鳥。いやカブトはそう言った。

西にかたむいた太陽の光を浴びながら、四ひきのカブトはあの住みなれた森に帰っていった。



選評

森松和風

(奨励賞)

『勇気が教えてくれたもの』

笠巻 省吾

無駄のない文章で、物語にすーっと入り込める作品。読み進めることに全く苦痛を感じなかった。海を形容するに「海は大きい」だけでよいという事実がよく分かる。

弱虫カブんと、カギとフォト。三匹の友情もよく描けていて泣けてくるが、獲物にありついた大鳥が、何故急に仲間にしてくれと願ったのか、そこがよくわからなかった。

大鳥には友達がおらず、生甲斐もなかったのだろうか。

カブト虫たちの勇気と友情に感服したのだろうかというところは伝わるし、色々想像させて良いのだが、その糸口だけでもストーリーに盛り込めばもっと完璧な物に仕上がっただろう。